

東洋人の西洋世界への開眼

伊原 沢 周

はじめに

幕末・清末において日本人・中国人が、西洋文物に直接触れ合つて以来、すでに一世紀半が立つ。当時の西洋に対するそれぞれの見聞や感想について、多くの記事と論述がある。しかし、両者の比較研究は、なお未開発の状態におかれていると思う。

東洋人が西洋で生活し、その洋式教育を受けた最初の人は、おそらく高知県の漁夫中浜万次郎（一八二七—一八九八）であつたらう。一八四一年出漁中に遭難し、米國捕鯨船に救助され、四三年米國本土に上陸した彼は、ポストン近くにあるリュイス・バーレット (Lewis Bartlett) 校に入学。三年間この学校に通い、航海術、測量学などを学び、四七年に卒業^①。その後、捕鯨業に従

事していたが、一八五二年十月、やっと郷里に帰つた。翌年、各藩や幕府に雇用され、英語、航海学などに力を尽し、咸臨号の航海にも通訳者として乗り組み大いに活躍した。

万次郎がバーレット校を卒業した一八四七年は、ちょうど中国最初の外国留学生容闈（一八二八—一九二二）が米人宣教師ブラウン (S. R. Brown) に連れられてアメリカに到着した時だった。容は、マサチューセッツ州のモンソン・アカデミー (Monson Academy) で二年間学び、一八五〇年にイエール大学に進学し、五四年に同大を卒業している。

容闈は一八五五年中国広東に帰郷した。この時、あたかも太平天国革命の最盛期で、万次郎のような幸運に恵まれず、暫く英人商社に勤めていたが、一八六三年に至り、はじめて両江総督曾國藩に招かれた^②。その後、曾総督らを中心とした「洋務運動」の推進に重要な役割を果たした。

万次郎も容闈も全く個人の関係で渡米し、当時、それぞれの自國政府との関係が全然なかった。政府が西洋へ直接送った最初の使節は、いうまでもなく、日本の万延元年（一八六〇）の遣米使節である。これは、一八六六

年中国最初の訪欧団より六カ年早かった。この二つの東洋人の使節団が、欧米先進国に対して、いったいどう考えていたのか、当時残されたいくつかの文献記録に基づいて比較して見れば、なかなか興味深いものがある。本論は、それらを中心にして検討しておきたい。

一 万延元年の遣米使節

一八四二年に結ばれた中英南京条約により、中国の開港は余儀なくされた。これは、日米和親条約の締結より十二年前であったが、その後、両国の世界観の差異により、対欧米政策が、ますます大きく趣きを異にしていたのである。一八六〇年（万延元年）に至り、清朝では中華帝国思想が未だ完全に潰滅されていないおり、徳川幕府は、一步先んじて遣米使節を派遣した。このいわゆる万延元年の遣米使節は、日本近代史においてきわめて深い意味を持つものである。つまり、今回の使節は、単に日米条約本書批准交換の使命を帯びていたのみならず、西洋文物の視察も兼ねており、日米間の理解を深めた。また、使節と同行した咸臨号一行のアメリカ見聞も日本の近代化に貴重な参考となったといわなければならない。この遣米使節の派遣は、幕府が米国の駐日総領事ハリ

スと周密に打ち合せて行なわれたものである。使節一行は、正使新見正興、副使村垣範正を初め、諸役人、通詞、漢方医師、従僕など合計七十七人に達している。一八六〇年二月十三日、アメリカからの迎えの軍艦ポーハタン(Powhatan)号に搭乗した使節一行は、横浜を出帆しサンフランシスコに向かった。それと同時に、使節護衛や航海研究のため、別艦としての咸臨号が随行した。咸臨艦提督木村喜毅、艦長勝麟太郎(海舟)を初め、士官、水兵、漢方医師、大工、鍛冶など、合計九十人。その中には、福地源一郎と福沢諭吉が含まれている。

今回の大型遣米使節団は、紀元六三〇年(舒明二年)の第一回遣唐使と、その内容や時代に相違はあるが、形式上においては、類似のところがあるのでないか。遣唐使節の時も、正使犬上御田鍬、副使薬師恵日らが多くの随員を率いて二隻の船で渡唐し、⁽³⁾唐との友好関係を深めたからである。しかし、一九世紀中葉に行なわれたこの遣米使節の、異文化圏でのちょんまげに帯刀の風姿がアメリカ人に与えたイメージは、奇妙かつ不思議な東洋の神秘でしかなかったかもしれないが、日本人の目に映ったアメリカは、いうまでもなく、西洋の近代文明とその合理的、民主的社会制度そのものであった。

太平洋を横断した使節一行がサンフランシスコに到着したのは、同年三月二十九日である。同地で大歓迎を受けサンフランシスコ市を見学した。一週間ほど滞在、四月七日使節一行は、咸臨号一行を同地に残してポーハタン号でサンフランシスコ港を出帆し、翌月十四日ワシントンに到着した。使節らは、まず大統領ジェームズ・ブカナン (James Buchanan) に謁見し、日米条約批准書を交換した。これらの公式行事が終ると、使節一行は、議会議事堂、造船所、海軍測量局、農場、教育施設、学校、博物館、天文台などを見学し、さらにワシントン駐在各国公使館を訪問した。一行は六月八日、ワシントンを出発し、フィラデルフィア、ニューヨークと、各地で短期滞在し、見聞を広めた。六月三十日、使節一行は、ナイアガラ号でニューヨーク港を出帆し、大西洋、インド洋、香港を経由して、横浜港に帰着したのは、同年十一月九日であった。また、咸臨号は、サンフランシスコのメリア島造船所で修理のため、同地に五十余日滞在、同年五月八日サンフランシスコ港を出帆し、ハワイを経由して六月二十四日、品川沖に帰着した。使節一行より約五カ月早かった。のみならず、見聞の範囲もサンフランシスコ市に限られたが、その後、日本に与えた影響は、決し

て使節一行に遜色ないものであった。では、彼らの見聞について述べる。

(A) 使節一行の記事

アメリカに入国後使節一行は、まず、アメリカ側主催の歓迎パーティーに臨んだ。当時の状況は、

男女凡二三百人詰居、堂内ガス灯夥シク釣下ゲ白昼ノ如シ、暫シテ料理飾付之処へ正使ヨリ拙者迄召連椅子ニカ、ラス、台上食品盛上ケシ上へ紙製ニテ小ナル御国旭旗米利堅花旗ヲ建、第一ニ日本ノ祝盃ヲ捧グ、余ガ後ロノ方ニハ男女入雜リ立ナガラ食飲ス、料理ハ豚鶏、菓子果物ハ紅熟ノイチゴヲ高クモリアゲ白砂糖ヲカケ小皿ヘトリ分ケ各々飽食ノ様子ナリ、中席ニテダンス舞踏ノ場所へ案内、此処男女雜還ナリ、何故ヤラ男子進デ婦人ヘ式礼シ、男子左手ニテ婦人ノ右手ヲ握リ、右手ヲ婦人ノ背ヘ廻シ、婦人左手ヲ男子ノ方ヘ廻ス、右ノ如ク何人トナク組合セ胡楽ニ合セ息ヲ限りニ舞踏廻旋ス、初ハ徐ニシテ後ニハ急ナリ、観者目眩スルカ如シ、踊ルモノ竟ニハ目ヲ据ヘ息キヲ限リト必至ニ廻旋ス、其喧敷事言語ニ絶セリ、イサ、カ猿淫ノコトハナシトイヘトモ、実ニ觀ルニ堪エス⁽⁴⁾

という。アメリカでは、踊るだけでなく、あいさつも、性別を問わず、握手を行なっている。たとえ「若き女有たるも、外国人始メ逢ひ候へとも恥羞様ナシ、時候挨拶いたし、サタント申（手を握之礼を云ふ）日本之女子より氣丈ニ有之」と。ことに「婦人ノ貴コト男子ノ能所ニ非ス」⁽⁶⁾との風習は、日本の男尊女卑と全く対照的であると、使節一行の共感である。

大統領に謁見した際、その印象については、大統領年齡五十二三歳、身丈ケ高ク、色白ク、白髪ニシテ少シ近目ノ形アリ、容具温和ニシテ面上笑ヲ含ム、其服常人ニ異ラス」との好感を得たようだ。なお、その全米最高指導者たる大統領の選出について、次のように述べている。

大統領位年尽レハ、国人事務宰相ヲ位ニ立ツ、宰相辞レバ、以下三五人ノ高貴人ノ順序ヲ以テ立ツ、高貴人皆辞レバ、国人宰相三五人ノ高貴人ト先大統領ノ隱居シタル者トヲ入札ニシテ、其名ノ多有者ヲ以テ立ツ、一説ニ里人ヲ際ノ外、万民共徳アルモノヲ入札スト云、官人等公用ニ有テハ官服ヲ着シ、威光凛々タリ、内ニ在テハ庶人ト異ナル事ナク、或ハ商売シ、或ハ農稼ス、大統領ヲ初メ平服独歩、僕ヲ従ヘズ、或ハ車ニ乗ス、遊見ス、市人礼スル事ナク、

冠ヲ脱事ナク、人家ニ入レバ大統領冠ヲ脱シテ入ル、国人国ノ為ニスル事知テ、王ノ為ニナル事ヲ言ス⁽⁸⁾これは、アメリカの民主政治を相当理解している、といつてよからう。


また、教育など諸施設の視察にも熱心であった。たとえば、小学校の教育については、

学校之教は童子六七才より拾壹才迄之もの△別に机を置、後之方江腰掛ケ置、一机にて兩人つゝ、順々にて席を改め、小童之分はアヒセ（ABC）ヲ誦詠いたし居、拾壹才より以上ハ横文之文章等を習ひ、言詞遣ヒ習ヒ、或ハ算術ヲ習ひ、機械之絵図引を習ひ、地利（理）・天文ヲ習ひ、画を習ひ、分析術を習ひ、製菓之制法之術を習ひ、諸機械之巧製習ひ、右師たるものハ文章手習読にて、婦人之師、絵図計、或ハ機械、或ハ制（製）菓、或画之類ハ男人之師、夫々学校之内に間切在リ、其師ニ随ヒ銘々教諭ヲ受ク⁽⁹⁾

という。女子教育については、「女子之方ハ貧民の娘、又悪しき業致候女子等、十五六位迄ニ而、歌唱候業・針仕事・手跡等之場所所有之、其内教文之論し候場も有之」⁽¹⁰⁾という。そのほかに、孤児院の教え方は、「子供ヲ此処

エイレ置キ性質ヲ見立教諭スル由」と。盲人学校は、「十歳未満ヨリ十五六歳ノ盲目兒女凡百人、男師并助教アリテ、読書・算学・琴瑟・唱歌、繡縫ヲ教ユ、其読書ノ法ハ、凸字版書ヲ手指ニ触レ読ム、算法ハ教授人某ノ数ト某ノ員ハ幾何数ヲ積ム哉ヲ問フ、即時其問ノ数ヲ計ヘ、答フ」という状態だ。これらの学校視察記事は、後に明治五年学制の成立に及んで影響が決してないとはいえないと思われる。

文化・科学技術などの重要な施設も視察した。たとえばワシントンにある Smithsonian Institution に收藏された珍禽虫奇珍貝魚類などを見学、また、造船所を訪ねる。新築の議会議事堂を見学、同議会図書館にて欧文日本文典なども調べる。さらに夜天文台を訪問し、次のように記している。

此処ニ望天鏡仕掛アリ、捻ニテ上ケ下ケイタシ極星ヲ窺フ、鏡中ニ線アリ星ノ大キサ肉眼ニテ見シ左ノミ替ルコトナシ、階段屈典シテ極高キ台ニイタル、広サ三間四方モアルベシ、屋根形チ丸ク聳ユ、車仕掛ニテ吾人ニテ車ノ機械ヲ廻セバ屋根意ノ如ク廻リ一方ヲ透シ先木屋ヲ窺、木屋ノ大月ノ如シ、左右ニ小星アリ、又土星ヲ窺フ¹³如此土星大ナルコト月

ノ如クニシテ輪ヲ帶ブ、又月ヲ窺フ此夜半月ナレトモ金形大ニシテ鏡中ニ容ラス、月の光金光如湧光ニ種々ノ形状アリ、世界火山ノ影モ見ユト云¹³このような理解は科学知識がないと、とうていできないであろう。これによっても使節一行中にはかなりの人材がいたことを物語っている。

ニューヨークでの活動は、市庁の訪問、図書館の見学などである。図書館の蔵書的情況については、「万国ノ珍書類沢山鏤刻蔵貯有之、唐本ハ纔ニ四書正文一部ヲ見タリ、法帖モ一二アリ、何レモ書棚ニ位置整然ト載セ有之」と、広く世界文化に関心を持つアメリカに敬意を払っている。それと同時に、『亜行日記』の著者名村元度は日高圭三郎、川崎道民とともに、ニューヨーク市最大の書店「アブルトン」へ行き、洋書を買求め¹⁴西洋文化研究に魂を打ち込もうとした。万延元年の遣米使節一行は、アメリカの近代文化に、異文化の真価を認め、カルチャーショックを受けただけでなく、熱心に考察し、吸収しようとした。

ワシントン・ニューヨークは、アメリカの政治・経済の中心であるのみならず、欧米先進国の中においても屈指の大都市である。使節一行はワシントンには五月十四

日から六月八日まで、ニューヨークには六月十六日から六月三十日までそれぞれ滞在した。議事堂、市庁などの政府機関を初め、各種の学校、図書館、博物館、天文台などの文化施設、海軍造船所、測量局などの近代科学技術設備および病院、孤児院、牢獄などの社会福祉施設などを多方面にわたって広く精力的に視察し、その内容もきわめて豊富である。この一連の視察は、数分間で済ませた公的条約批准書の交換式よりはるかに意味深いものであったと、いわなければならぬ。

(B) 威臨号一行の記事

一八六〇年三月十七日、威臨号一行はサンフランシスコ港に到着し、同年五月八日帰国するまで、ずっと桑港に滞在していた。時点から見れば、使節一行の滞米期間より短い。視察の都市も桑港一ヶ所に限られた。かつ当時この桑港のあらゆる施設や文化は、米国の先進地域たるワシントンやニューヨークには、はるかにおよびなかつた。にもかかわらず、日本の近代化にもたらした威臨号一行の影響は、無視されるわけにはゆかない。

威臨号一行の見聞記事は、その記事の件数と内容は使節一行よりやや少ないが、独自のな見解や感想がよく表出していると思われる。たとえば、アメリカの豊かな社

会に対して、

僕市中様ヲ歴観スルニ絶テ貧困饑餓ノモノナシ、怪ンテ之ヲ問フニ、其輩有ル時ハ政所ヨリ法ヲ以テ相應ノ業ヲナサシメ、又ハ病人或ハ老衰ノモノハ養生館ヲ立置、斯ニテ保養ヲ致サセ夫々其生ヲ終ヘシムト云フ。¹⁶⁾

との理由は、実は、近代国家の「良法」によつたものであると、高く評価している。また、米人のマナーに学ぶべきところもある。

此国の人皆懇篤にして礼讓あり、今度我國との交際を悦び、其傭婦・販夫に至るまで吾船のはしめて来りしを快とせざるものなく、就中其官人ハつとめて懇切周旋し、毫も我徒に対し輕蔑侮慢の意なきは、まことに我

皇国の威靈ともいふべきなれと、また其国の風俗教化の善をも思ひ知るべきなり。¹⁷⁾ という。ことに艦長勝海舟は、

総て士農工商の差別無く売鬻交易を事とし、士はいわゆる「ビュルゲル」(則ち士にして農商を兼ねたる者)にしておのれ官途にありといえども積財ある者は其の子弟をして商売交易をなさしむ。財多から

ざる者は数人連合し、一店或は二店を設け倍利配分を事とす。又致仕隠遁なせば其の好む所に応じ高官の家といえどもさまたげず。故に市中の官員ら皆貨物をひさぎ或は大店数所を保ち巨船を造り、他邦に交易なす等其の積財の多少による。我が邦士官員にたえてなさざるところ、只郷土と唱うる者と相似て其の権勢の異なるのみ¹⁸⁾

と指摘し、資本主義社会をほめたたえ、封建有司社会に非を鳴らしている。さらに、「平常往来する者、士商官員の区別なく無刀唯杖を持つ」と、帯刀の風習や、「すべて婦女を尊敬すること甚しく」と、男尊女卑の差別を批判した¹⁹⁾。このような鋭い洞察力と批判的精神をもって海舟は、幕政改革から明治維新にかけて重要な役割を果たした。なかんずく、西洋文化に心酔し、その導入を心がけた福沢諭吉は、『万延元年アメリカハワイ見聞報告書』を中津藩に提出した。それによれば、アメリカの「家造りは都て石室にて、四階、五階、稀には七階位も見受候事有之候。室内四壁天井共白塗に致し、板敷にはカーベット申織物か、念入候処は天鷲絨杯を敷、大低（抵）十五、六畳位の間毎に、幅三尺五寸、長六尺余の硝子窓二ヶ所位在之候」と、生活のレベルについては「本邦の物

価に比較致候へば、平均七、八倍の直段にて可有之、米杯は一升白銀拾五〇（匁力）余に相当申候」と、生産力とその道具については「都て力を費し候事業は、悉く蒸気仕掛に致、木挽、金物製作、通用金鑄立、砂糖製造、麦粉を碾り候点も蒸気機関の仕掛に有之候」と、また交通については、「蒸気船は最多く、軍艦、測量船、諸方渡海船、港内引船、□舟等、一切蒸気仕掛に致し有之、渡海船は晴雨に不拘毎日数艘仕出申候。大形の船には人数五、六百人も乗せ申候」という²⁰⁾要するに、アメリカの近代物質文明と自然科学の優れたところを絶賛している。

この威臨号訪米について、一八六二年（文久二年）遣欧使節一行に参加した福沢は、訪米の経験や見聞をふまえて、訪欧の見聞もまとめ、『西航記』を著している。さらにこれを発展させ、ついに思想をも啓蒙する著名な『西洋事情』を書き上げている。

『万延元年アメリカハワイ見聞報告書』は、中津藩に提出するために書かれたものであるといわれている。この報告文はやや短いものであるが、非常に簡潔で要領をつかんでいる。アメリカが彼に与えたいろいろの印象やその感想を、報告書の中では、充分に書き尽くされた

はいえなかったが、後の『福翁自伝』の中に、それらがことごとく述べられている。たとえば、東洋文化とは甚だしく異なる西洋文化の洗礼を受けた彼が、当初、西洋社会の風俗になじめない精神的葛藤が、次のように示されている。

日本を出るまでは天下独歩、眼中人なし怖い者なしと威張っていた磊落書生も、初めてアメリカに来て花嫁のように小さくなってしまったのは、自分でも可笑しかった。それから彼女の貴女紳士が打ち寄り、ダンシングとかいって踊りをして見せるというのは毎度のこと、さて行って見たところが少しもわかわらず、妙な風をして男女が座敷中を飛びまわるその様子は、どうにもどうにもただ可笑しくてたまらない、けれども笑っては悪いと思うから成るだけ我慢して笑わないようにして見ていたが、これも初の中は随分苦勞であつた。²²⁾

という。また、アメリカ合衆国建国の父ワシントン初代大統領の子孫が、今どうしているかを尋ねたところ、米人の娘があるはずだ、今、どうしているか知らないとの返事に、福沢は、不思議がって驚いている。「ワシントンの子孫といえば大変な者に違いないと思うたのは、

此方の脳中には、源頼朝、徳川家康というような考えがあつて、ソレから割出して聞いたところが、今の通りの応に驚いて、これは不思議と思うたことは今でも能く覚えていゝる。」という。ついで「理学上のことについては少しも胆を潰すということとはなかったが、一方の社会上のことについては全く方角が付かなかつた」という感想をもらしている。これは前掲野々村忠実の米大統領記事より米国民の感情にまで深い理解を示した一面ではなからうか。のみならず、前掲名村元度らは、ニューヨークで洋書を買求めたが、いったい、どんな本を購入したかは不明である。しかし、福沢は中浜万次郎とサンフランシスコ市でウェブストルの字引を一冊ずつ買って来た。さらに同市の China Town で貿易実務用の中英語彙集、中国人子卿著『華英通語』を入手した。『華英通語』は、帰国早々、中国語・英語対照の原本に日本語訳をつける作業にかかり、三カ月後には『増訂華英通語』として刊行された。²³⁾ これらの辞書は、『西洋事情』の完成に重要な役割を果たしたことは間違いないと見られる。

要するに、使節一行の多くは、幕府の旧官僚で、彼らの見聞記事は、報告書の域を出なかつたが、咸臨号一行の福沢は一思想家、一学者、一教育家、一ジャーナリス

トとしてその見聞を充分に理論化させ、ついに幕政改革から維新変革に至るまで、日本の近代化の思想的指導者となつたのである。

遣米使節一行がアメリカから帰国途中に、清国の首都北京は英仏連合軍に占領された。一九六〇年十月二十四、五兩日、清朝政府は、やむを得ず恭親王奕訢を遣わして、英仏兩國代表との間にそれぞれ北京条約を結んだ。それから数年後、中国最初の訪欧団の派遣が、奕訢によって実行されるに至つたのであった。

二 中国の訪欧団

英仏連合軍の役が一段落した後も、清朝政府の命取りともなりかねない太平天国の革命氣勢はいささかも衰えなかつた。彼らを鎮圧するため、清朝政府は英仏の力を借りて太平軍に全面的反撃を加えた。ついに一八六四年七月、曾国藩の部隊「湘軍」が、やっと太平天国の首都金陵（現南京）に入城し、太平天国最後の指導者忠王李秀成を逮捕した。ここに至つて、太平天国の反清運動が、一応、終止符を打った。清朝政府は内外ともに平和を回復し、奕訢は内閣に当る軍機処、総理衙門の実権を一手に掌管した。一八六六年（同治五年）二月二十日、彼は、

西欧への使節を送るべきとの建言を上奏した。すなわち、以下である。

查自各国換約以来、洋人往来中国、於各省一切情形、日臻熟悉、而外国情形、中国未能周知、於弁理交涉事件、終虞隔膜。臣等久擬奏請派員前往各国、探其利弊、以期稍識端倪、藉資籌計。惟思由中国特派使臣前赴各国、諸費周章、而礼節一層、尤難置議、是以遲々未敢瀆請。茲因給稅務司赫德來臣衙門、談及伊現欲乞假回国、如由臣衙門派同文館學生二名、隨伊前往英国、一覽該國風土人情、似亦甚便等語。臣等伏思同文館學生内、有前經臣等考取奏請授為八九品官及留學者、於外国語言文字、均能相識大概。若令前往該國游歷一番、亦可增广見聞、有裨學業。（中略）惟該學生等皆在弱冠之年、必須老成可靠之人、率同前去、庶沿途可資照料、而行抵該國以後、得其指示、亦不致因少不更事、貽笑外邦。茲查有前任山西襄陵縣知縣斌椿、現年六十三歲、（中略）前年五月間、經給稅務司赫德延請弁理文案、並伊子筆帖式広英、襄弁年余以来、均尚妥洽。擬令臣衙門割令該員及伊子筆帖式広英同該學生等、与赫德前往、即令其沿途留心、將該國一切山川形勢、風土人情、

隨時記載、帶回中国、以資印証²⁶⁵

その要点をまとめると、一、諸外国との条約が結ばれて以来、西洋人は中国のことをよく知っているが、中国人は西洋の事情に暗く、相互に理解しあうというのは困難である。これを克服するため、二、欧米への使節派遣は一途ではなからうか。しかし、中国と西洋諸国間の儀礼問題にからんで容易に実現できないかも知れないが、今度の総稅務司（稅関長）R・ハート（Sir Robert Hart、赫德）の休暇帰英の機を選んで、北京同文館（外國語学校、一八六二年創設）の学生数人を選抜し、ハートに随行させ、西洋の地理、風俗、習慣などを視察させ、見聞を広げるならば、誠に有益である。しかし、三、同文館の学生らは、まだ弱冠で、經驗も浅い。もし年長者の斌椿を学生の監督として派遣すれば、最も適切であろう。斌椿は、かつて山西省襄陵県の知事で、年は六十三才、現在、ハートの秘書を勤めている人物である。

この突訴の上奏文に基づいて清朝政府最初の使節派遣が決定された。使節というよりもむしろ觀光旅行団であった。清朝政府が正式に國書を持って使節を派遣したのは、一八六八年二月、アメリカ人バーリンゲーム（Anson Burlingame、蒲安臣）が清朝政府を代表してアメリカと

西欧諸国を訪問した時であった。にもかかわらず、今回斌椿一行の訪歐は、政府から派遣された最初の「使節」であるので、日本の万延元年遣米使節と同一の意義を持つものである。さて、斌椿一行の見聞は、どうであったのかを、簡単に述べておきたい。

一八六六年三月十五日（同治五年一月二十九日）、訪歐団は、天津から船で出発し、上海に向った。一行は、斌椿を中心に、北京同文館の学生三人、斌椿の子広英および従僕六人、計十一人であった²⁶⁶。上海に到着すると、ハートの命によって稅関職員英人一人、仏人一人が一行に加わり、沿道の案内役を勤めた。したがって總勢十三人であった。

同年五月二日（三月十八日）、マルセイユ港に上陸した斌椿一行は、フランス訪問を皮切りに、ロンドンでは別便で帰英したハートと再会した。その後、イギリスからオランダへ、さらにハンブルグ、デンマーク、スウェーデン、フィンランド、ロシア、プロシア、ベルギー諸国をめぐって歴訪し、同年八月二日、再びパリにもどり、同月十九日マルセイユを出帆し、十月二十日（九月十二日）上海に帰国した。

斌椿一行の訪歐日数は、百余日に達し、万延元年遣米

使節の滞米期間（桑港八日、ワシントン、フィラデルフィア、ニューヨーク四十六日）や咸臨号の滞米期間（桑港五十二日）から見れば、倍ほど長かっただけでなく、視察した西欧諸国も十以上に及んでいる。しかし、その見聞記事は、斌椿の『乗槎筆記』、『海国勝遊草』および『天外帰帆草』という三小冊の記事以外になにもなかった。これらは、万延元年遣米使節一行と咸臨号一行の見聞記事に比較すれば、質においても、量においても、相当の開きがある。にもかかわらず、このわずかの記事こそ、アヘン戦争後における中国知識人が、西洋見聞とその反響の一端を垣間見ることのできた最初であった。

いうまでもなく、ヨーロッパを訪れた斌椿一行が、まず彼らの目にしたのは、近代西洋の物質文明と科学技術のすばらしさである。たとえば、清潔また整然とした町並み、ガス灯・水道・エレベーターなどの設備がある高層建築物、電信・汽車・汽船の交通機関などである。パリに着いた斌椿は、町で自転車に乗っている人を見付けると、「両足跨軸端、踏動機、馳行疾於奔馬²⁷⁾」と、驚異の目をみはった。これはサンフランシスコに着いたばかりの福沢が、「此方は一切万事不慣れで、例えば馬車を見て初めだから実に驚いた²⁸⁾」ということと、全く同じ

ように感じたのである。また、男女間のあいさつの時、握手やキス、または抱擁をする光景を見て、奇異に感じるのも東洋人の共通意識であった。

パリでフランス政府のレセプションを受けた斌椿一行は、市内の造幣局、電信局、印刷工場などを見学。パリ駐在英、米、露諸国公使館を訪問した。五月十七日（四月四日）、フランスからイギリスに渡った。

実に、斌椿一行の訪欧は、ハートの努力によって実現されたともいえる。したがって、今回の主要な訪問国は、イギリスであった。ロンドンに到着した一行は、ハートの案内で、イギリスの税関を視察した。年間二千六百万ポンドの巨額の関税収入の実態を見聞きした斌椿は、開港と貿易のしくみと、その重要性が、ようやく分ったようだ。また、議会議事堂を参観し、その建物の雄偉に賛歎してやまなかった。議会の代議士「六百人は、各町村で選出され、国の重要なことを議決する。もし食い違ふ意見が生ずるならば、論弁を経て多数の同意を得て可決して実行する。たとえ君主といえども、この議案をかってにくつがえすことはできない²⁹⁾」と記しているが、その君主立憲政治体制を深く掘り下げた評価も感想もなかった。斌椿は、同文館のアメリカ人教師マーティン（W.

A.P. Martin) の訳本『万国公法』を北京で読んだこと
があり、ある程度の政治学の知識を持つ。議会以外の一
般行政組織、たとえば、市庁などの視察にも目を向ける
べきであるが、そこまでは全く言及していない。

六月五日(四月二十三日) バッキンガム宮殿にて催さ
れたレセプションで、英国の皇太子の、「ロンドンの様
子は中国と比べると、いかがですか、両国の距離はあま
りに遠く、往來は大変不便ですが、今度のご旅行は、い
かがでしたか。また、昨日ご覧になった離宮の景色は、
お気に召しましたか」との問いに、斌椿は、「従来中国
の使節は外国へ行ったことがございませぬ。今回の外遊
によって外国の優れたところを始めて認知致しました」
と答えた。翌日、さらに女王ビクトリアに謁見した。女
王は、「いつロンドンにいらっしゃいましたか」と、斌
椿は「もう半月以上になります」と、女王は、「わが国
の風俗習慣は中国と異っていますが、ご覧になってい
かが思召されましたか」と、斌椿は「半月以来、ロン
ドンの多くのものを拝見致しました。雄偉な建物やま
とに精美的な製品の数々は、どれも中国よりすばらしいも
のです。また行政の面においても学べきところが多々
あります。今度、陛下のお陰で、いろいろの名所を拝観

させていただき、まことに感謝致します」と、女王は、
「今回のご来遊によって両国の友好関係がいっそう深ま
ることを期待します」と、斌椿は「ありがとうございます
です」という^⑩。

西洋文化から完全に隔絶した中国の社会において、六
十三年の生涯を送ってきた斌椿は、西洋文化に対して、
科学技術の精巧さを称賛、羨望する以外に、政治、社会、
文化など全般にわたって視察する興味をあまり持ってい
なかった。女王との対話の中では、イギリスの行政の善
さに少々触れたが、これは、あくまで皮相の認識で、そ
の中に潜む民主的精神には、全く思い至らなかった。こ
とに西洋近代文化の発展を支えた教育、たとえば各種学
校の状況を視察しなかったのは、全く不思議である。イ
ギリスの代表的大学の一つたるオックスフォード大を見
学に行ったが、同大学の二、三のカレッジの建物を観覧
したという極めて簡単な記事があるほかは、なにも言及
していない^⑪。これは、遣米使節一行中の益頭尚俊が、ワ
シントンにある大学「ヒヨドリヒヤ」を見学したこと、
全く正反対である。益頭は、同大学の施設、研究情況お
よび研究内容などを熱心に調べ、その視察の実況を詳細
に記している。のみならず、一般学校の教授法、テキス

トの内容、実験室の設備も見てまわった。³²⁾西洋近代教育に対する価値観の日本の「侍」と中国の「士大夫」との差は、これによっても明らかである。しかし、今度の訪欧が、斌椿の思想に何らかの変化を与えないはずがなかった。すなわち、彼の天文学知識の概念の転換である。

周知のとおり、中国の古い典籍、ことに『山海経』などのような神話、怪談の影響を受けた中国知識人のほとんどは、地球は正方形で、静止不動の状態におかれていたと固く信じていた。もちろん、斌椿もその中の一人であった。彼は友人マーティンから著書『地球説略』をもらって読んだが、何の影響も受けなかったようだ。ところが、今度の訪欧によって初めて地球は、文字どおり円形で、また自転するものであると確認した彼は、「書云地形方」という中国の伝統説を、体験による裏付けによって、根底から否定した。また、「地球系自転、一日一週天」³⁴⁾、すなわち、地球自転一週が一昼夜となるという説が、動かない事実であることも認めるに至ったのである。

このような彼は、いわば自然科学の教養はゼロに近く、ロンドンの名高いグリニッチ天文台を見学することも全く考えていなかった。彼の目を引いたのは、ロンドンの

美しい離宮や教会のすばらしい建物、武器製造工場・兵営、造幣局、動物園などであった。

ロンドンの観光日程が終ると、斌椿一行は、バーミンガムの機械製造場、ガラス工場、さらに、マンチェスターの紡績工場などを視察した。同年六月十三日（五月一日）ロンドンにもどった彼らは、暫らく同地に滞在し、同月二十四日船でオランダへ向かった。一向の滞英延べ日数は三十八日間で、彼らの訪欧全日程延べ日数（五月二日より八月十九日にかけて合計一〇九日）の三分の一を占めている。換言すれば、訪欧の主要な目的が一応達成したといえよう。

イギリスを離れて北欧を訪問した斌椿一行は、オランダの堤防、風車、デンマークの人魚の像、スウェーデンの王宮、博物館、ペテルブルグの宮殿、ベルリンの市街などを訪ねた。ことに世界的に有名なクルップ兵器工場の見学に、彼は一段と興味を示した。北欧では、スウェーデンの皇太后に謁見している。皇太后は、「従来、中国人の来訪者はいなかった、今日、中華帝国の使節に面会できたことは、なによりも喜ばしい」と、斌椿は、「わが国の役人は、かつて洋行したものがない。貴国は北欧にあり、こちらまで来なければ、そのたいそうすぐれ

たところを知ることができませんでした」と答えた⁽³⁵⁾。確かに斌椿の云うとおりである。中国の古い社会に閉じ込められた役人の世界観は、伝統的中華思想の枠に限られた井の中の蛙であった。しかも知る必要を感じないほどに疲弊していた。中国が先進欧米諸国に立ち遅れた最も重要な原因は、ここにあると考えられる。

『乗槎筆記』は、約二、三万字ほどの日記で、斌椿訪欧の重要な記事が全部収められている。『海国勝遊草』は漢詩七十一首、『天外帰帆草』は漢詩六十六首をそれぞれ集めたものである。その多くは風土、人情、景色などを描き、史料としては、使用しにくい面もある。同年十一月八日（十月七日）北京に帰着した斌椿は、この『乗槎筆記』などを総理衙門の大臣、たとえば奕訢らに提出したのに違いない。これらは、一八六六年（同治五年）以降、奕訢、曾国藩、李鴻章らを中心として推行された洋務運動に多かれ少かれ資したのではあるまいかと推測される。

旧中国社会の知識人としての斌椿の外遊は、実は、これほどとも破天荒の試みであった。当時、北京の役人たちは、誰も洋行は望まなかった。というのは、まず船酔いが堪難い。次には外国の風俗、習慣、食べ物などに慣

れない。その上、言語不通が加われば、なかなか辛いことだからである。一般的に言えば、日本人は好奇心や適応性が中国人より強い。たとえば咸臨号に随行した福沢諭吉が、著名な蘭医桂川甫周の紹介を通じて提督木村に是非アメリカへ連れて行ってくれと、依頼したことは、その一例である⁽³⁶⁾。斌椿は、当時中国知識人の中で、わりあい見識が広く、勇気がある役人であった。地理書として有名な『瀛環志略』の編集者徐繼畬は、『乗槎筆記』の序文を書き、「願華人入海船、総苦眩暈、無敢応者、斌君友松、年已周甲、独慨然願往⁽³⁷⁾」と、訪欧の使命を慨然として引き受けた斌椿を、ほめたたえている。また、マーティンの著書の中においても、

Pinchun(斌椿), a respectable old Manchu who had filled the post of prefect, was at that time acting as private secretary to the inspector-general. Expressing himself as willing to brave the dangers of the deep, he was designated to proceed to the Western world, not as minister, but as a sort of diplomatic scout.

と、正式使節ではない斌椿が、外交視察者として海外を慢遊したのは、勇気のある、尊敬に値する人物である、

と述べている。

要するに、斌椿の訪欧記事は、質においても、量においても、万延元年遣米使節一行や咸臨号一行に比べることもできないが、とにかく、清朝政府から派遣された最初の外遊者で、その著書の影響が、あまり見られなかったとはいえ、西洋文化に触れ合った見聞を初めて中国知識人に伝えたことは、やはり意義のあることだと言えよう。

おわりに

斌椿一行の訪欧が、日本より六十年も遅れたのは、当時中国内外の不安な情勢によったかも知れないが、中国の外来文化の受容性の欠如、ことに「華夷」思想の堅持がその主な原因にほかならなかった。

一八五四年に結ばれた日米和親条約によって日本が開港され、幕府は、いち早く西洋文化に対する価値観を変えた。つまり実用の蘭学の習得から、さらに英学にまで進め、これによって幕末衰退の補強をはかった。西洋文化摂取のため、西洋諸国との直接接触が必要であった。しかも史実における遣唐使の例があったので、遣米使節の派遣は、何らの不自然もなかった。これは、当時の中

国とは、ずいぶん異るところである。

幕府は周密な計画のもとに、遣米使節をアメリカへ送った。全国各藩の優秀な人材を慎重に選抜し、多くの有能な者を集めたことは、清朝政府が派遣した斌椿と三人の学生で結成された訪欧団より意気込みや、その陣容において、はるかに壮観であった。当時、日本の使節一行の訪問は、ただアメリカ一國だけであったが、その内容は多種多様であった。アメリカのあらゆる文物、制度、施設などの見学、ことに各種学校の視察に熱心であったのは、日本の近代化の促進に少なからぬ影響を及ぼしたと見られる。ことに福沢は、役人の職を退け、畢生の精力を教育に打ち込み、鋭い文筆で封建社会の愚昧無知と戦った。もちろん、後に福沢が唱えた「脱亜論」を、われわれは再検討の必要があるが、日本が封建社会から近代社会に移行する段階において、福沢の『見聞報告書』、『西航記』などに基づいて書かれたと見られる『西洋事情』は、「明治新政権の成立後、西洋世界に対する開国と国内における制度と思想の变革を準備する上で大きな役割を演じたのである」といえる。また、遣米使節の歴史的役割について、金井圓氏は、一、海外事情についての見聞を広めたこと、二、遣欧使節への寄与、三、貨幣

制度に対する寄与、四、近代的国防組織への開眼、五、科学知識の導入・英学の発達などの五点をとりあげている。⁽⁴⁰⁾これに対して、斌椿の訪欧成果について、どう評価すべきだろうか。いまのところまで、特定テーマの研究は、まだないといってよい。もしあげるならば、鍾叔何氏の「中土西来第一人」と題する論文である。氏は、洋行後の斌椿の思想があまり変化していないと、いつているが、彼の見聞記事の影響については言及していない。⁽⁴¹⁾だが、清史の大家蕭一山氏は、斌椿の洋行記事は、総理衙門大臣の対外観を改めて、清朝政府の正式遣使に寄与した、と指摘している。⁽⁴²⁾

近代における日中両国最初の遣使意義とその影響については、両国の内外環境条件の相違によってそれぞれの評価が違ふ。アジア人の西洋文化摂取の角度から見れば、日本人は中国人よりはるかに進取の気性や受容性がある。遣米使節によって幕府役人の洞察力と決断力が、かなりのものであることが示唆されている。まさに咸臨号一行に参加した福地源一郎のいうように、

徳川幕府の末路と雖とも、其執政有司中敢て全く人材なきには非ざりき。(中略)余が親しく見聞する所に拠れば、或は方正厳直、私を棄て、公に殉せる

者あり、卓識達観、国家を以て己が任とせる者あり、機智穎才、百難を排するの器を有せる者あり、直語讜議、敢て權豪を憚らざる者ありて、若し一々に之を観察すれば、其人物中、或は明治昭代の今日に於ても、得易からざりし程の材器ありを信するなり。⁽⁴³⁾といっている。

かくして、幕末の徳川幕府は、清末の清朝政府よりその先進性があったといつてよからう。換言すれば、清末の改革運動は、実は、幕末の幕政改革にもおよばないと考えられる。

注

(1) 中浜東一郎『中浜万次郎伝』八三頁、昭和二一年、富山房、東京。

(2) Yung Wing: My Life in China and America, P. 143-8, Henry Holt and Company, New York, 1909. 容闈『西学東漸記』(容先生自叙)八一―九〇頁、一九一五年、商務印書館、上海。百瀬弘記註『西学東漸記』一二七―一二九頁、一九六九年、平凡社、東京。

(3) 第一回遣唐使の随員と船の数について、正確な記録がないが、森克己氏によれば、「はじめは極めて小規模であつて、遣唐使一行の人員は百二十人前後、

- 船も一隻から二隻位であった」という。森克己『遣唐使』二九頁、昭和四一年、至文堂、東京。
- (4) 森田清行『垂行日記』三、『万延元年遣米使節史料集成』(昭和三六年、風間書房、東京) 第一卷一二八―一二九頁。
- (5) 益頭尚俊『垂行航海日記』二、同集成第二卷九九頁。
- (6) 福島義言『花旗航海日誌』地、同集成第三卷三二六頁。
- (7) 同上、同集成第三卷三二八頁。
- (8) 野々村忠実『航海日録』卷二、同集成第三卷二二三頁。
- (9) 同注(5)、同集成第二卷一一三頁。
- (10) 日高為善『米行日誌』、同集成第二卷二〇―二二一頁。
- (11) 前掲垂行日記四、同集成第一卷一七四―一七五頁。
- (12) 名村元度『垂行日記』、同集成第二卷二四三頁。
- (13) 前掲垂行日記四、同集成第一卷一五一頁。
- (14) 同上、同集成第一卷一九四―一九五頁。
- (15) 注(12)、同集成第二卷二四〇頁。
- (16) 長尾浩策『垂行記録』、同集成第四卷二二七頁。
- (17) 木村喜毅『奉使米利堅紀行』、同集成第四卷二四四頁。
- (18) 勝海舟『海軍歴史』卷之八「威臨艦米國渡航」中、『勝海舟全集』12卷二四三―二四五頁収録、一九七一年、勁草書房、東京。

- (19) 同上。
- (20) 『福沢諭吉選集』第一卷六一九頁収録、一九八〇年、岩波書店、東京。
- (21) このことについて、まさに松沢弘陽氏が指摘しているように、「一八六二年のヨーロッパ行の成果は先ず『西航記』に現われ、『西洋事情』にいたって一つの集約をされている。さらに、人に示すまでにとめられた『西航記』に先立って、パリ以降身边に携えていた備忘録『西航手帳』があったし、『西洋事情』初編の版刻に先立ってその一部の原型が元治・慶応の交(一八六四〜五)には写本として流布しており、いずれも今日に伝わっている。このような、西洋経験のフィールドノートともいうべき『西洋手帳』からその総括『西洋事情』のさし当り初編までを通観する時、われわれはそこに啓蒙期の福沢の原型ともいえるものが既に形をとり始めているのに気がかされる。」という通りである。同注(20)二七六頁。
- (22) 『福翁自伝』一一五頁、一九七八年、岩波書店、東京。
- (23) 同上、一一七頁。
- (24) 同注(20)二七三頁により。
- (25) 『籙弁夷務始末』同治朝三九卷一―三頁。
- (26) 斌椿『乗槎筆記』、二月二十一日の条。鍾叔何主編『走向世界叢書』収録、一九八五年、岳麓書社、長沙。

- (27) 同上、三月二十二日の条。
- (28) 注(22) 一一三頁。
- (29) 同注(26)、四月十八日の条。
- (30) 同注(26)、四月二十三、四日の条。『海国勝遊草』二九「四月二十三日英国君主請赴宴舞宮飲宴」。
- (31) 同注(26)、四月二十五日の条。
- (32) 益頭尚俊『垂行航海日記』二、一一二—一一三頁、注(4) 第二卷収録。
- (33) 前掲海国勝遊草。
- (34) 同上。
- (35) 同注(26)、六月一日の条。
- (36) 前掲福翁自伝一〇七頁。
- (37) 注(26)。
- (38) W. A. P. Martin: A Cycle of Cathay, P. 372, Fleming H. Revell Company, New York, 1900.
- (39) 前掲福沢諭吉選集第一集二六九頁、松沢弘陽「解説」。
- (40) 前掲遣米使節史料集成第七卷五一—六一頁。
- (41) 前掲走向世界叢書六七—八二頁。
- (42) 蕭一山『清代通史』卷下八六〇—八六一頁、民國五二年、台湾商務印書館、台北。
- (43) 福地源一郎『幕末政治家』「叙言」一頁、明治三三年、民友社、東京。
- (本稿は昭和六二、六三年度の金谷治教授を研究代表者とする文部省科学研究費補助金による、筆者分担研究の成果の一部である。)